『東京大学言語学論集』32 (2012.9) 67-84

『英和対訳袖珍辞書』の構成法の考察

三好　彰

キーワード: 英和辞書　英蘭辞書　辞書の構成

要旨

幕末に刊行された『英和対訳袖珍辞書』の底本は英蘭・蘭英辞書の Picard (1857) の英蘭部である。『英和対訳袖珍辞書』の邦訳語には Picard (1857) の与えているオランダ語訳をもとに邦訳したものと、オランダ語訳を介さないで英語から直接邦訳したものが混在している。前者のケースで英語の意味を解さないで邦訳したために誤訳になっている実例を示す。『英和対訳袖珍辞書』ではこのような誤訳が回避できているケースが多いので、編纂者が英語の知識を有していたと考えられる。

『英和対訳袖珍辞書』の見出し語には Picard (1857) に出ていないものがあり、Picard (1857) に出ているのに採録されていないものがある。これらは手稿から版下を作る際の実務上の工夫によるものである。

1. はじめに

『英和対訳袖珍辞書』(堀 達之助編 1862)の見出しは語のほかに句と例文があるが、これらを総称してエントリーと呼ぶことにする。『英和対訳袖珍辞書』のエントリーの総数は 35,031 であるが、このエントリーは原則としてオランダで刊行された英蘭・蘭英辞書 Picard (1857) の英蘭部に拠っていることが先行研究で知られている（岩崎克己 1935: 51 、杉本つとむ 1981: 695)。

Picard (1857) が複数のエントリーに同じオランダ語訳を与えていることがあり、その邦訳の差異から英語、オランダ語、日本語の間にある翻訳上の問題点を検証する。そして Picard (1857) が複数のオランダ語訳を与えているエントリーで邦訳が 1 つであるものを中心に英語、オランダ語、日本語の間にある翻訳上の問題点を考察する。

ついで、『英和対訳袖珍辞書』のエントリーと底本である Picard (1857) のエントリーとの間には出入りがあることを示し、その理由を考察する。

2. 訳語の構成

先ず Picard (1857) におけるエントリーとオランダ語訳の構成を検討し、『英和対訳袖珍辞書』の邦訳との関係を考察する。

次に『英和対訳袖珍辞書』のエントリーと邦訳語の構成を検討し、Picard (1857) のオランダ語訳との関係から英語、オランダ語および日本語の間の翻訳に関わる問題点を考察する。

2.1 『英和対訳袖珍辞書』の英語のエントリーに対応する Picard (1857)のオランダ語訳

Picard (1857) は英語のエントリーに対してオランダ語訳を与えているわけだが、1 つの英語のエントリーに対して複数のオランダ語訳を与えていることがある。

たとえば Picard (1857) は英語 Scholar, *s.* に対して 2 つのオランダ語訳 *geleerde*, *leerling*, m. を与えている[1]。そこで『英和対訳袖珍辞書』に採録されているすべての英語のエントリーについて、それに与えられているオランダ語訳の個数を調べた。なおオランダ語訳は単語のほかに解説した文や句の表現になっているものがあり、また例文や句のエントリーは複数のオランダ語で表現されているわけだが、これらも 1 つのオランダ語訳とみなすと『英和対訳袖珍辞書』全体では表 2.1 に示すような分布であった。

表 2.1　英語のエントリーに対するオランダ訳語数の分布

オランダ語訳の語数	比率(%)
0	0.9
1	58.7
2	25.2
3	9
4	3.3
5	1.3
6 以上	1.6

表 2.1 からオランダ語訳が 1 つだけの英語のエントリーが『英和対訳袖珍辞書』全体で 6 割弱であることが分かる。このように単一のオランダ語訳が多いのは Picard (1857) がポケットに入る小さな辞書であることが背景にある。

上記した Scholar はオランダ語訳の語数が 2 であるものの 1 例である。1 つの英語に対して最大で 19 ものオランダ語を与えているのがある、それは動詞の run である。

表 2.1 でオランダ語訳の語数が 0 なのは、たとえば動詞の過去形を "Awoke, pret. of awake" と書いて原形を示すに留めていてオランダ語訳が与えられていない場合や "Sicamore, *see* Sycamore" のように異形表現の同義語が別にあることを示していてやはりオランダ語訳を与えていない場合である。

---

[1] Picard (1857) は英語のエントリーをローマン体で書き、オランダ語訳をイタリック体で書いている。英語の品詞の略号はイタリック体であり、オランダ語の品詞の略号はローマン体である(男性名詞は m. 女性名詞は f. 中性名詞は n.)。本稿はこれに従う。
なお『英和対訳袖珍辞書』は「略語ノ解」として次のように見出し語の品詞を略号で示している。

略号	*adj.*	*adv.*	*art.*	*conj.*	*interj.*	*prep.*	*pron.*	*s.*	*v. a.*	*v. n.*
品詞名	形容辞	副辞	冠辞	接續辞	間投辞	前置辞	代名辞	實名辞	他動辞	自動辞

本稿はこれに準ずる。

さて表 2.1 で示すように英語のエントリーに対して与えられているオランダ語訳が 1 つだけのものの中に複数の英語のエントリーが共通の 1 つのオランダ語訳になっているのがある。たとえば 2 つのエントリー Disciple と Learner のオランダ語訳はともに *leerling* であり、Disciple と Learner はそれぞれ leerling と 1:1 になっている。つまり Disciple と Learner という 2 つの英語のエントリーが 1 つのオランダ語訳 leerling を共通に持っている。

このように英語のエントリーに対して与えられているオランダ語訳が 1 つだけのケースにおいて、同一のオランダ語訳を持つ英語のエントリーの件数を『英和対訳袖珍辞書』全体で総ざらいして表 1.2 に示す。

表 2.2 Picard (1857) でオランダ語訳が同じである英語のエントリーの件数の分布

オランダ語訳が同じである英語のエントリーの数	オランダ語訳が同じである英語のエントリーの個数の分布
1	66.7%
2	18.7%
3	7.9%
4	3.6%
5	1.8%
6 以上	1.3%

表 2.2 で同一オランダ語訳になる英語のエントリーの個数が 1 であるのはオランダ語訳と英語エントリーが Picard (1857) で 1;1 に対応しているものであり、Disciple と Learner のケースは同一オランダ語訳 *leerling* になる英語のエントリーの個数が 2 の場合である。

表 2.2 は複数の英語がエントリーが 1 つのオランダ語訳に対応することがあることを示しているが、その最多は次の 11 もの英語のエントリーが 1 つのオランダ語訳 *bedriegen* (動詞) に対応しているケースである。

Bilk; Cheat; Chouse; Cozen; Cully; Deceive; Dupe; Fob; Gull; Jockey; To put upon

2.1.1 複数の英語のエントリーが 1 つのオランダ語訳に対応するケース

複数の英語のエントリーが 1 つのオランダ語訳に対応するケースが管見で 2,436 組あり、そのエントリー総数は 6,097 である。このケースは邦訳の表現が同一なものと異なっているものに 2 分される。

複数の英語のエントリーが 1 つのオランダ語訳に対応するケースで、その邦訳が漢字の書体、送り仮名、ルビの有無などを含めて同一の表現になっているものが管見で『英和対訳袖珍辞書』に 418 組あり、そのエントリーの総数は 945 なのでエントリー全体の中の 2.7%にあたる。

複数の英語のエントリーが 1 つのオランダ語訳に対応するケースで、その邦訳に漢字の書体や送り仮名に差があり、さらにルビの有無などで異なった表現になっているが日本語の意味は同じと見なせるものが若干数ある。

これらを除くと Picard (1857) が複数の英語のエントリーに同一のオランダ語訳を与えているのに意味的に異なる和訳になっている。ここに英語、オランダ語、日本語の言語学的な特質に関わる問題があると考えるので以下に論ずる。

(a)　複数の英文に同じオランダ語訳が与えられているケース

『英和対訳袖珍辞書』に出ている英語の例文に同じオランダ語訳が与えられているのが 1 ケースだけある。そのオランダ語訳は *honger is een scherp zwaard.* であり、英文と邦訳文はエントリー Belly, Ear, Hunger のところにそれぞれ次のように出ている（文頭が小文字なのは原文のママ。邦訳の小フォントは注釈である）。

a hungry belly has no ears.	飢タル腹ハ耳ガナイ 貧苦ニ迫レバ恐怖スル処ナシ
A hungry belly has no ears.	飢タル腹ハ一ツノ耳ヲ持ス 飢餓ノ時ニ当リテハ道理ヲ弁ルニ暇ナキ意
hunger beats down stone walls.	飢ハ石ノ壁ヲ倒ス 飢ハ大ナル威勢デアルト云フ意

オランダ語文 *honger is een scherp zwaard.* を逐語訳すると「飢えは切れの良い刀である」となるが、上記の 3 つの邦文はこれとは異なっている。それどころか、いずれも英文によって訳を付けている。そしてエントリー Belly と Ear の英文は同じだが邦訳、特にその注に差があるので別の人が訳を付けたと考えられる。

考えてみると洋書調所では万延元年(西暦 1860)から英語の教材を使って英語の教育が行われていたし、欧米でもてはやされた Lindley Murray 著の上級者向けの英文法書が文久元年(西暦 1861)に英文のまま『英吉利文範　二編』として復刻されていたのだから、この程度の英文がこなせたのは十分に首肯できる(三好彰 2012)。

なお例文には英語から訳したのかオランダ語訳から訳したのかが分かるケースがほかにもあるが、多くの場合英語に拠っていることを筆者が明らかにした (三好彰 2009)。

(b)　複数の英語のエントリーが多義である 1 つのオランダ語訳に対応するケース

複数の英語のエントリーが 1 つのオランダ語訳に対応するケースの一例だが、オランダ語訳がともに *traan* である Trainoil と Eye-drop を『英和対訳袖珍辞書』はそれぞれ「鯨油」と「涙」と異なる意味に訳している。そこで幕末に多用された蘭和辞書の『和蘭字彙』(桂川甫周編 1858)で *traan* を引くと「鯨ノ煎シ油」と「涙」が出ており、現在の『オランダ語辞典』(日蘭学会 (1994))にも「涙」と「鯨油、魚油」が出ている。

このように英語と日本語から見て多義のオランダ語 *traan* だが、『英和対訳袖珍辞書』は英語の Trainoil と Eye-drop の意味に沿って正しく「鯨油」と「涙」とに訳し分けている。オランダ語だけからでは英語の意味に沿うように訳し分けることはできないことがある。

オランダ語 *traan* は英語と日本語から見て多義であるが、このように複数のエントリーが同一のオランダ語訳となるケースでそのオランダ語訳が多義であるのが『英和対訳袖珍辞書』の中に管見で 200 件以上ある。その中で下記の 4 件は多義である邦訳語の選択を間違えており誤訳になっている。

- オランダ語訳が ezel である4つのエントリー Ass, Donkey, Easel, Jackass

  Picard (1857) で4つの英語のエントリー Ass, Donkey, Easel, Jackass のオランダ語訳が同じで *ezel* である。『英和対訳袖珍辞書』はその邦訳を順に、「驢」、「驢馬」、「驢馬」、「牝ノ駅馬、愚人」としている。『和蘭字彙』は *ezel* に「ロバ、愚か者、画ガクトキ用ユル台」と3つの邦訳語を与えている。よって Easel を「驢馬」としたのは英語 Easel の意味を知らない人が、多義であるオランダ語から間違えて選択した誤訳である。

- オランダ語訳が *jagt* である4つのエントリー Yacht, Hunt, Hunting, Huntsmanship

  Picard (1857) で4つの英語のエントリーYacht, Hunt, Hunting, Huntsmanship のオランダ語訳が同じで jagt である。『英和対訳袖珍辞書』はその邦訳を順に、「狩」、「狩り」、「狩」、「猟」としている。

  オランダ語の名詞は男性名詞（略称 *m.*）、女性名詞(略称 *f.*)、中性名詞(略称 *n.*)に3分されるが、『和蘭字彙』は女性名詞としての *jagt* を「狩」とし，中性名詞としての *jagt* を「貴人ノ乗ル船」としている。それゆえ Hunt, Hunting, Huntsmanship の邦訳は良いとして、問題は Yacht の邦訳が「狩」になっていることである。『和蘭字彙』から邦訳をつけるなら Picard (1857) が Yacht の *jagt* を中性名詞としているので「貴人ノ乗ル船」とすべきだったが、選択を間違えて「狩」にしてしまっており誤訳である。英語の Yacht の意味を知らず、またオランダ語文法の女性名詞と中性名詞の区別を知らない人が「狩」に誤訳したと考えられる。

- オランダ語訳が *ent* である2つのエントリー Scion, Graft

  Picard (1857) は2つの英語のエントリー Scion と Graft に同じオランダ語訳 *ent* を与えており、『英語対訳袖珍辞書』はそれぞれ「鴨 家鴨野鴨ノ総名」と「接木（ツギ）」である。『和蘭字彙』は *ent* に「鴨」と「接木」の両義を与えている。ところが英語 Scion の意味は「鴨」でなく「接ぎ木」であるから選択を間違えた誤訳である。

- オランダ語訳が *kouter* の2つのエントリー Colter, Coulter

  Picard (1857) は 2 つの英語 Colter にオランダ語訳として男性名詞の *kouter*、英語 Coulter にオランダ語訳として中性名詞の *kouter* を与えている。そして『英語対訳袖珍辞書』は Colter を「鋤ニ付テアル鉄ニテ作リタル刃」とし、Coulter と「噺スル人」している。『和蘭字彙』は男性名詞の *kouter* を「噺スル人」、中性名詞の *kouter* を「鋤ノ刃」としているのだが、英語の Colter と Coulter は同義であって「鋤の刃」のことであるから Coulter を「噺スル人」としたのは間違いである。オランダ語の名詞の性の区別に詳しくない人が英語の Coulter の意味を解しないでオランダ語の男性名詞の *kouter* から付けてしまった誤訳である。

この4件の中で *jagt* と *kouter* の誤訳はオランダ語文法の知識があればオランダ語から訳しても英語の意味に合った意味に邦訳できるが、 ezel と ent の誤訳は英語の知識が無いと誤訳は

回避できない。

200余件のなかで英語のエントリーの意味に合わない邦訳になっているのは、管見ではこの4件だけである。つまりこの4件以外は英語エントリーの意味に符合しているので全体としては英語の意味をくみ取って邦訳したと言える。

(c) 英語の発音とオランダ語の発音に拠った邦訳

エントリー Walrus と Narwal のオランダ語訳は *walrus* [2]で同じであり、『英語対訳袖珍辞書』の邦訳は次の通りである。

Walrus, *s.*　　「グルーンランド」ニ居ル大魚ノ名

Narwal, *s.*　　「グリキンレンド」ニ居ル大魚ノ名

ここで「グルーンランド」はオランダ語の *Groenland* の発音に拠っており、「グリキンレンド」は英語の Greenland の発音に拠っている。洋学が蘭学から英学に切り替わっていく時期を反映しており興味深い。

なお『英和対訳袖珍辞書』にはこのような英語の発音に拠った邦訳と、オランダ語の発音に拠った邦訳が混在しているが、前者の方が後者よりも圧倒的に多いことを筆者が明らかにした(三好彰 2009)。

2.1.2　1つの英語のエントリーが多義であるオランダ語訳に対応するケース

表2.1と表2.2から英語のエントリーが単一のオランダ語訳にしか対応しないもの、つまりオランダ語訳から見ても1つの英語のエントリーにしか対応しないものは『英和対訳袖珍辞書』全体では39%[3]となる。

このオランダ語訳のなかにも日本語から見て多義なのがあり、管見で次の4件は選択を間違えて誤訳になっている。

- オランダ語訳が *baai* であるエントリー Baize

  オランダ語 *baai* に『和蘭字彙』は「内海、トロメンノ類」の両義を与えている。『英語対訳袖珍辞書』は Baize を「港」と訳しているが、英語 Baize は「フェルトに似た,通例,緑色の柔らかい毛または綿の生地」のことなので誤訳であり、『和蘭字彙』から取るなら英語 Baize の意味を解して「トロメンノ類」とするべきだった。ちなみに『広辞苑』によると「トロメン」は「綿糸に兎の毛をまじえて織った舶来の布」である。

- オランダ語訳が *reukeloos* であるエントリー Inodorous

  オランダ語 *reukeloos* に『和蘭字彙』は「先キ見ズノ、匂ヒノナキ」の両義を与えて

---

[2] Walrus はセイウチ、 Narwal はイッカクであるが、Picard (1857) は Walrus と Narwal に *walrus* という同じオランダ語訳を与えている。ちなみに『和蘭字彙』は *walrus* を「臥来(グルーン)狼徳(ランド)亜(レンド)ニ居ル大魚」と訳している。

[3] 表2.1でオランダ語訳の語数が1なのは58.7%であり、表2.2でオランダ語訳が同じであるエントリーの数が1なのは66.7%なので、エントリーが単一のオランダ語訳にしか対応しないものは両者の積であり、0.568x0.667=0.390、つまり39%である。

いる」。『英和対訳袖珍辞書』は Inodorous を「大胆ナル」と訳しているが、英語 Inodorous の意味は「香りのない」なので誤訳であり、『和蘭字彙』から取るなら英語 Inodorous の意味を解して「匂ヒノナキ」をとるべきだった。

- オランダ語訳が *schout-bij-nacht* であるエントリー Rear-admiral

  オランダ語 *schout-bij-nacht* に『和蘭字彙』は「船大将、産婆」の両義を与えている」。『英和対訳袖珍辞書』は Rear-admiral 「産婆」と訳しているが、英語 Rear-admiral の意味は「少将」なので誤訳であり、『和蘭字彙』から取るなら「船大将」をとるべきだった。

- オランダ語訳が *spat* であるエントリー Spavin

  オランダ語 *spat* に『和蘭字彙』は「トバシリ、吹キ矢、馬ノ足ニアル腫物」を与えている」。『英和対訳袖珍辞書』は Spavin 「吹キ矢」と訳しているが、英語 Spavin の意味は「馬のかかとの内側が腫れる病気」なので誤訳であり、『和蘭字彙』から取るなら「馬ノ足ニアル腫物」をとるべきだった。

この 4 件は英語の意味を解さずに、日本語から見て多義であるオランダ語に惑わされて誤訳したとみなせる。英和辞典なのだから英語に合う邦訳にしなくてはならない。

2.1.3 英語のエントリーに複数のオランダ語訳が与えられているケースへの付言

表 2.1 に示すようにオランダ語訳が 1 つだけの英語のエントリーが『英和対訳袖珍辞書』全体で 6 割弱(58.7%)である。ところで 1 つの英語のエントリーが複数のオランダ語訳を持つ場合に、そのオランダ語訳の 1 つに上記の 6 割弱に該当するオランダ語訳が出てくることがある。たとえば Picard (1857) では次の 2 つのエントリー Dab, Spot のオランダ語訳の 1 つとして 2.1.2 で取り上げたオランダ語訳 *spat* が下記のように出ている。

Dab,*s.* *tikje*, n. *spat*, f. *etukje*, n. *bedreven gast*, m. *botje*, n.

Spot, *s.* *vlek*, *spat*, *plek*, f.

『英和対訳袖珍辞書』全体では複数のオランダ語訳を持つ英語のエントリーのほぼ 20%に、英語のエントリーに 1 つだけ与えられている *spat* のようなオランダ語訳が出てくる。よってそのオランダ語が多義であってもそれに惑わされることなく英語エントリーの意味にそって正しく邦訳されているケースがさらに広がる[4]。

2.2 『英和対訳袖珍辞書』の英語のエントリーと邦訳の関係

---

[4] 筆者は先の報告(三好彰 (2011))で『英和対訳袖珍辞書』の手稿がエントリー Dangle の邦訳の 1 つを「「スリンゲル」ニテ石ヲ投ル」としている件を論じた。Picard (1857) が Dangle のオランダ語訳の 1 つを *slingeren* としており、『和蘭字彙』は「「スリンゲル」ニテ石ヲ投ル」と「ユサブル」の両義としている。手稿は前者を取ったが英語 Dangle に「石を投げる」という意味はない。校正の段階で「動揺スル」と訳し直しているのは英語の意味を知ってのことである。

Dangle のほかに下記の 11 のエントリーのオランダ語訳に *slingeren* が含まれるが、いずれも英語の意味にそって訳し分けており誤訳は見当たらない。

Bob, Oscillate, Pitch, Seel, Sinuate, Sling, Swag, Swing, Toss, Vibrate, Worry

『英和対訳袖珍辞書』は英語のエントリーに対して邦語訳を与えている。その邦語訳は単語のほかに解説した文や句の表現になっているものがあり、また例文や句のエントリーは複数の日本語で表現されているわけだが、これらも 2.1 に準じて 1 つの邦語訳とみなして英語のエントリーに与えられている邦語訳の個数を調べた。『英和対訳袖珍辞書』全体では表 2.3 に示すような分布であった。

表 2.3 の分布状況は表 2.1 のそれに酷似している。『英和対訳袖珍辞書』のエントリーが蘭英辞書である Picard (1857) に拠っているので、そのオランダ語訳から邦訳を得たからこのように酷似すると短絡的に考えてしまいそうだ。

表 2.3　英語のエントリーに対する邦訳語数の分布

邦語訳の語数	比率(%)
0	0.8
1	58.5
2	27.1
3	8.7
4	2.8
5	1.1
6 以上	1.0

2.2.1　オランダ語訳の語数が 1 つである英語エントリーに対する邦訳語の語数の分布

Picard (1857)ではオランダ語訳の数が 1 つである英語エントリーは表 2.1 に示すように『英和対訳袖珍辞書』全体の 58.7%に達する。このケースについて英語のエントリーに対していくつの邦訳語が与えられているかを調べ、その語数の分布を表 2.4 に掲げる。

表 2.4　オランダ語訳の語数が 1 つである英語エントリーに対する邦訳語の語数の分布

単一オランダ語訳の英語エントリーに対する邦訳の個数	単一オランダ語訳の英語エントリーに対する邦訳の個数の分布
1	83.7%
2	14.5%
3	1.5%
4	0.2%
5	0.0%
6 以上	0.0%

(a)　英語のエントリーに対してオランダ語訳が 1 つであって邦訳語が 1 つのケース

表 2.3 に示すように英語のエントリーに対してオランダ語訳が 1 つなら邦訳語が 1 つである場合が 83.7%と一番多い。ただしこの中に少数だがオランダ語が英語から見て多義であるケースが含まれているのは 2.1.1 と 2.1.2 で例示した通りであるが、それを除けば英語とオランダ語

が同義となりどちらから訳しても同じ邦訳が得られる。つまり英語から訳してもオランダ語から訳しても同じ邦訳になるケースが『英和対訳袖珍辞書』には多い。

このケースの3例を随意に取り出して以下に示す、左から順に英語エントリー、Picard (1857) の与えているオランダ語訳、そして『英和対訳袖珍辞書』の邦訳である。

Chemist, *s.*	*chemist*, m.	分離家
Mesentery, *s.*.	*darmvlies*, n.	腸膜
University, s.	*hoogeschool*, f.	大学校

(b) 英語のエントリーに対してオランダ語訳が1つであって邦訳語が複数であるケース

83.7%の残りに当たる16.3%は英語のエントリーとそのオランダ語の間では1:1の関係にあるが邦訳は複数になっている。このケースも英語から訳してもオランダ語から訳しても同じ邦訳になる。このケースの3例を随意に取り出して以下に示す。

Class, *s.*	*klasse*, f.	部分ケ、階級
Hyacinth, *s.*	*hyacint*, f.	赤瑪瑙、水仙ノ一種
Throne, *s.*	*troon*, m.	椅子、帝王ノ位

英語とオランダ語はともにインドヨーロッパ語族のゲルマン語派に含まれており、共通のゲルマン祖語を持つとされており近い関係にあることがこれらの単語からも窺える。ところがこれらの単語に対して日本語では複数の表現が必要になる。

2.2.2 オランダ語訳の語数が複数ある英語エントリーに対する邦訳語の語数の分布

表2.1に示すように1つの英語のエントリーに対してオランダ語訳が複数あるケースが『英和対訳袖珍辞書』全体のなかの40%以上ある[5]。このケースについて英語のエントリーに対していくつの邦訳語が与えられているかを調べた、その語数の分布を表2.5に掲げる。

表2.5 オランダ語訳の語数が複数である英語エントリーに対する邦訳語の語数の分布

複数のオランダ語訳を持つ英語エントリーに対する邦訳の個数	複数オランダ語訳を持つ英語エントリーに対する邦訳の個数の分布
1	22.7%
2	45.9%
3	19.5%
4	6.8%
5	2.6%
6以上	2.5%

表2.5で目に付くのは、英語のエントリーに複数のオランダ語訳が与えられているケースの22.7%に1つの邦訳しか与えていないことである。それゆえ表2.1と表2.4から英語エントリー、オランダ語訳、邦訳が1:1:1の関係にあるのは0.587x 0.837 = 0.491 、つまり全エントリーの49%

[5] 表2.1でオランダ語訳の語数が2以上なのは0と1のケースを除いて 100%-0.9%-58.7%= 40.4%

が該当する。そして 1 つの英語エントリーに複数のオランダ語訳が対応するもので邦訳が 1 つのケースは表 2.1 と表 2.5 から　(1-0.587) x 0.227 = 0.094 であり、これを加えると 0.585 (58.5%) となり表 2.3 の 58.5%に一致する。つまり表 2.1 と表 2.3 が酷似しているのは英語エントリーとそのオランダ語訳、および邦訳が 1:1:1 の関係にあるからではなく、このような複雑な関係の結果による。

オランダ語訳の語数が複数ある英語エントリーに対して邦訳語が 1 つだけになっている事由は多様であって掴みきれないが気の付くのは次の点である。

(a) 類義語

英語もオランダ語も周辺の言語から多くの言葉を取り入れてきた歴史があり多数の類義語がある。『英和対訳袖珍辞書』は英学の黎明期に編纂されたので英語の初学者を意識して類義語の意味の微妙な差に深入りしなかった気配が感じられる。

- 邦訳「怒り」のケース

  3 つのエントリー Anger, Ire, Wrath に Picard (1857) は 2 つのオランダ語訳を共通に与えている。『英和対訳袖珍辞書』の邦訳とともに記すと次の通りである。

Anger, *s.*	*gramschap*, f.; *toorn*, m.	怒リ
Ire, *s.*	*gramschap*, f.; *toorn*, m	怒リ
Wrath, *s.*	*gramschap*, f.; *toorn*, m	怒

- 邦訳「兜」のケース

  2 つのエントリー Casque, Helmet に 2 つのオランダ語訳を共通に与えており、『英和対訳袖珍辞書』の邦訳とともに記すと次の通りである。

Casque,*s.*	*helm, stormhoed*, m.	兜
Helmet, *s.*	*helm, stormhoed*, m.	兜

この 2 つの例のように類義語の場合は英語からでもオランダ語からでも同じ邦訳が得られることが多い。

(b) オランダ語の名詞の性

日本語と英語で男女の区別をしない総称的な単語に Picard (1857) はオランダ語訳として男性名詞と女性名詞を併記している。

その一例に英語のエントリー Leman がある、Picard (1857) はそのオランダ語訳として男性名詞 *vrijer* と女性名詞の *vrijster* を併記している。そして『英和対訳袖珍辞書』の邦訳は「恋人」である。Picard (1857) のエントリーとそのオランダ語訳、邦訳の順に記すと次のようである。

Leman, *s.*	*vrijer*, m.; *vrijster*, f.	恋人

この 2 つのオランダ語訳から和訳すると「男の恋人、女の恋人」になるが、英語の Leman は総称的に男女のどちらも意味するから『英和対訳袖珍辞書』のように「恋人」とするのが英語

の邦訳としては好ましい。

ところが類似のケースの一例にエントリー Dancer がある。Picard (1857) のオランダ語訳、『英和対訳袖珍辞書』の邦訳は次の通りである。

Dancer, *s.*　　*danser*, m.; *danseres*, f.　　躍ル人又女

この邦訳に従うと英文に dancer が出てきたときに文脈から男女を区別したうえで「躍る人」か「躍る女」のどちらかを選ばねばならなくなる。しかし英語の Dancer は男女を区別せず総称的に踊る人を指すから単に「躍ル人」でよい。

なお総称的なエントリーに Picard (1857) が女性名詞のオランダ語訳だけを与えていて、それを受けた邦訳になっていて英語の意味にそぐわないのが次の 2 つである。

Starcher, *s.*　　*stijfster*, f.　　糊附ケモノシテ暮ラス女

Clearstarcher, *s.*　　*stijfster*, f.　　糊付ケスル女

英語の Starcher, Clearstarcher は男も含まれるので、総称的に「糊附ケモノシテ暮ラス人」、「糊附ケスル人」のように邦訳すべきである。

『英和対訳袖珍辞書』には Leman のように総称的にうまく訳せているケースと、Dancer のように総称的な邦訳になっていないケースが混在している。つまり英語から邦訳したものとオランダ語訳にそって邦訳したものが混在しており、後者には英和辞典として好ましくないものがある。

(c) 難語への解説

Picard (1843) の編者の Hendricus Picard は中等教育の先生であり英語を学び始める生徒のためにこの英蘭辞書を作った(三好彰 2009)。それで生徒にとって難解な言葉に解説を付けている。その一例としてエントリー Simony のオランダ語訳を『英和対訳袖珍辞書』の邦訳とともに以下に記す。

Simony, *s.*　　*het koopen van geestelijke ambten*, n.; *simonie*, f.　　宗旨ノ官位ヲ賣ル罪

Picard (1857) はオランダ語の *simonie* だけでは通じないとして解説 (*het koopen van geestelijke ambten*) を入れたと考えられる。そうしてこの邦訳は解説的で分かりやすい。

なお『英和対訳袖珍辞書』には Picard (1857) のオランダ語訳には見られない解説を含んだ邦訳が少なくないのだが、それは西洋の仕来りや制度などに馴染の薄い幕末の英学徒への配慮だったと考えられる。その 1 例としてエントリー Fire-ordeal をそのオランダ語訳、邦訳とともに以下に示す[6]。

Fire-ordeal　　*vuurproef*　　火ノ誓ヒ 焼鉄ヲ握ル 英国ニテ上第ノ人ニ用ユ

2.3 訳語構成のまとめ

『英和対訳袖珍辞書』のエントリーとそのオランダ語訳との構成を検討して英語のエントリ

[6] 邦訳「火ノ誓ヒ」に後続する小フォント部は解説である。なお『和蘭字彙』に *vuurproef* は採録されていない。

ーとオランダ語訳とが必ずしも 1:1 に対応しておらず、英語の意味に合う邦訳を得るのにオランダ語訳を利用すると好ましくない場合があることが明らかにできた。

3. エントリーの構成

『英和対訳袖珍辞書』のエントリーと底本である Picard (1857) のエントリーと間には出入りがあることを示し、その理由を考察する。これは印刷構成の不揃いさに気が付いたことがきっかけなので最初にページの構成を概観する。

本辞書の邦訳部の 1 ページは 19 行からなる段が 2 つで構成されており、全体では 953 ページから成る。邦訳に注釈をつける場合は字のサイズを半分にして本文の 1 行に注釈を 2 行に分けて書き込んでいる、これは基本構成の拡張形であり下記にその一例を示す。

Holidam, *s.*　我們ノ愛女[7]　ウィルギンメリー」ヲ云フ

エントリー（見出し語、句、例文）は英語であり活版で印刷されているが、邦訳部と同じく基本構成は各段が 19 行であり各行は約 6 ミリ幅である。そしてエントリーは最大で 21 文字まで収められる。

なお例文などで 1 つのエントリーが複数行となる場合は字のサイズを変えないで行間を半減させて印字しているおり行数が見かけ上で 19 行以上となる。その一例を下記に示す。

He sets the fox to keep the geese.　狐ヲ鳥ノ番人ニスル　反テ者ヲナスト云意

また 1 つのエントリーの邦訳部が複数行になることがあるが、その場合は原則としてエントリーが邦訳部の中央になるように揃えている、下記がその一例である。邦訳の前の記号は邦訳が複数行になることを示している。

Reexchange, *s.*　(替セヲ取組ミ持越タル先ニテ通ゼヌ時又元ヘ返ス替セ手形

3.1 段構成の例外

(a) 空白行のある段

空白の行があって 18 行しか使われていない段が管見で 44 か所ある。空白行の最初のものは 289 ページの左段で feel と feeler の間であり、最後のものは 922 ページの右段で Walking-staff と Wall の間である。

『英和対訳袖珍辞書』は 24 ページ分を一度に印刷したことが知られており（杉本つとむ (1981: 703)）、全体が 953 ページなので 24 ページの束が 40 あるが、その番号が各束の先頭ページの下段に印字されている。各束毎に空白行の数を示したのが図 3.1 である。辞書の最初から 12 束までには空白行がなく、それ以降の束に空白行がある。

[7] 注の「ウィルギンメリー」は英語 Virgin Mary によっている。興味深い英語からの邦訳である。

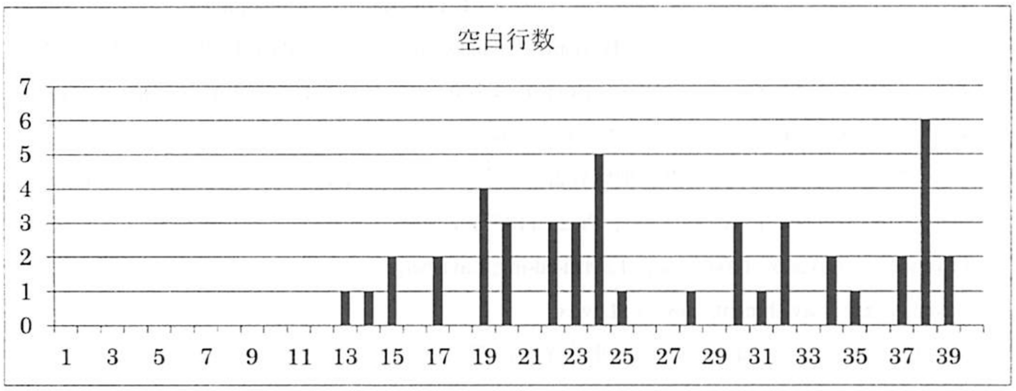

図 3.1　空白行の分布状況

(b) 20 行に見せかけている個所

邦訳部で 19 行を超えている段が 1 か所だけあり第 566 ページの右側の段が 20 行に見える。図 3.2 にその段の最下部を示すがエントリー Oyster に対する邦訳語の「牡蠣」を前後の行の中間に無理やり押し込んで 20 行に見せているが実質的には 19 行である。

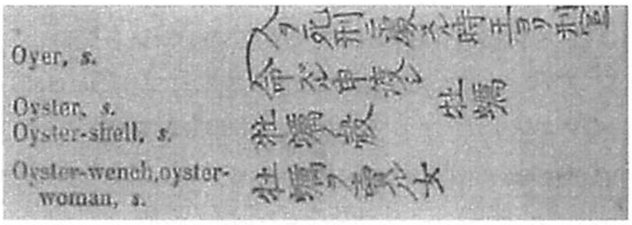

図 3.2　20 行に見せかけた個所

3.2 エントリー（語、句、例文）について底本との関係

『英和対訳袖珍辞書』のエントリー（語、句、例文）の底本はオランダで刊行された Picard 辞書であることが先行研究で知られていたが、2007 年に『英和対訳袖珍辞書』の草稿の一部が発見されて当初は Picard 辞書の初版 Picard (1843) に拠っていたが編纂の途中で Picard 辞書の改訂版 Picard (1857) に変更したことが判明した(三好彰 2007)。

詳細に検証すると、Picard (1857) のエントリーで『英和対訳袖珍辞書』に採録されていないものがあり、Picard (1857) に出ていないが Picard (1843) に出ているもので採録されているのがある。さらに Picard (1843) にも Picard (1857) にも出ていないが『英和対訳袖珍辞書』に採録されているのがある。それらについて例をまじえて以下に示す。

(a) Picard (1857) に出ている語で採録されていないエントリー（語、句、例文）

これまで指摘されていなかったが、 Picard (1857) に出ているが『英和対訳袖珍辞書』に採録

されていないエントリーが 54 個ある。これらは Emigrant や Memorable のように Picard (1843) にも採録されている 46 個と、Boyism や Sandwich のように Picard (1843) には採録されていない 8 個に分けられる[8]。この中で Boyism は 2007 年に発見された『英和対訳袖珍辞書』の手稿(名雲純一編 2007)には出ているので後に削除されたのが分かる。

また、これらのほかに『英和対訳袖珍辞書』ではエントリー Lave の次がエントリー Law の句である To study law になっていて、Picard (1857) にある下記のエントリーが見当たらない。

Lavender, *s.*; Laver, *s.*; Lavish, *adj.*; Lavish-ed-ing; Lavisher, *s.*:

Lavishly, *adv.*; Lavishment, -ness, *s.*; Law, *s.*

これら Lavender から Law までは編集作業中に落丁になってしまった考えられるので意図的な削除とはみなさないことにする。

よって Picard (1857) から削除されたエントリーは 54 個である。なおエントリーを削除したために空白行が生じたというページは存在しない。

(b) Picard (1857) に出ていないが Picard (1843) に出ているエントリーの採録

Picard (1857) に出ていないが Picard (1843) に出ているエントリーで『英和対訳袖珍辞書』に採録されているものが Enforce や Suffron-flower など 47 個ある。

なおページ毎に見て Picard (1857) に採録されているエントリーを削除して Picard (1843) からエントリーを復活させたページは存在しない。

(c) Picard (1857) および Picard (1843) に採録されていないエントリー

これまで指摘されていなかったが、『英和対訳袖珍辞書』には Picard (1857) にも Picard (1843) にも採録されていないエントリーとして次の 5 つが採録されている[9]。

Illumineren, *s.;* Saving, *prep;* Thin, *adj.;* Vindicatively, *adv.;* For の項に For god's sake

(d) エントリー（語、句、例文）について底本との関係の総括

(a)は Picard (1857) からエントリーを削除した例であり、(b)と(c)は Picard (1857) 以外からエントリーを追加した例である。コヨリの束毎にエントリーを削除した個数と追加した個数を図 3.3 に示す。

図 3.3 からエントリーの削除と追加に連関性が無いと受け取れる。また図 3.2 に掲げた空白行の分布との相関関係も無い。つまりエントリーの追加と削除は編纂担当者の裁量で行われたと考えられる。

---

[8] Picard (1843) に出ておらず Picard (1857) に出ているエントリーで『英和対訳袖珍辞書』に採録されていないエントリーは次の通りである。

In Bond; Boyism, *s.*; Maculi, *s.*; Nib-bed-bing; Tantrums, *s.*; Terminus, *s.*; Tocsin, *s.*; Transplendent, *adj.*

[9] Picard (1843) と Picard (1857) に見当たらないのだが『英和対訳袖珍辞書』のエントリーに Anthology, Egotism, Egotist、Intermission, Salt が同じつづりで重複して採録されている。邦訳表現は重複していないので、これらも独自に追加したものとすべきかもしれない。

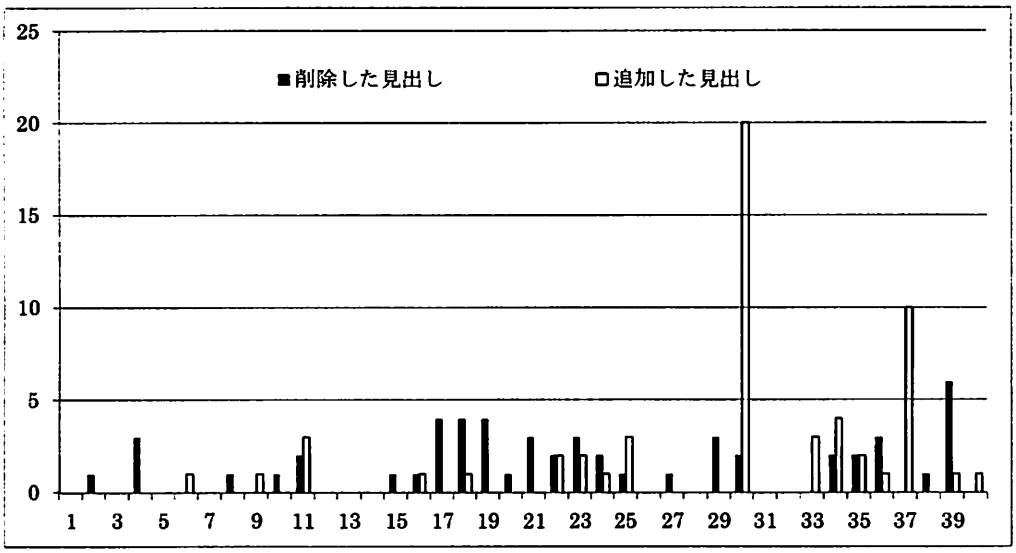

図 3.3　コヨリの束毎の削除したエントリーの個数と追加したエントリーの個数の状況

3.3 『英和対訳袖珍辞書』のエントリー構成の考察

『英和対訳袖珍辞書』には多くの空白行が存在すること、および底本である Picard (1857) に沿っていないエントリーがあることを明らかにしてきたが、ここでその理由を考察する。

2007 年に発見された『英和対訳袖珍辞書』の草稿(名雲純一編 2007)に使われていた用箋は 2 段構成であり、1 段が 30 行のものと 33 行のものがあった。行数の異なる用箋が使われているのは辞書編纂の校正段階の異なるものが混じっていたためであろうが、いずれにしろ印刷の基本構成は 1 段が 19 行なのでこの形式に変換しなくてはならない。

この変換作業を複数人で分担して工期の短縮を図ったであろう。また分担にあたり段構成を想定したことだろうが、実際に版木を起こすと 1 行に収める予定のところが 2 行に成ったり、その逆のこともあろうから 19 行に収まらない段ができたり、19 行以下となる段ができたと考えられる。

また図 3.1 に示した見かけで 20 行になっているのは苦肉の策である。これを避けるには原稿に入っているエントリーを削除することになり、Picard (1857) に出ているエントリーでも採録されていないものが出てくる。これが上記 3.2 (a)の原因と考えられる。その 1 つの例は 3.2 (a) で述べた手稿に出ているが刊本に出ていない Boyism である。

そうして 1 段が 19 行以下になると空白行が出るわけだが、そのまま空白にしておいたのが図 3.2 に示した箇所である。そうして空白行が出たところに Picard (1843) に出ているエントリー、ないしはそれ以外の辞書からエントリーを持ってきて埋めたのが上記 3.2 (b)と(c)の原因と考えられる。このような工夫の結果として Picard (1857) を『英和対訳袖珍辞書』の底本にしたが、当初底本としていた Picard 初版の影が残ったと考える。

なお、ここで述べた工夫の講じられている辞書上の位置は図 3.3 で示すように局所性が見られるので『英和対訳袖珍辞書』を統一した方針ではなく編纂担当者の裁量で行われたとみなせる。

上述したことのほかに Picard (1857) では、たとえばエントリー Contract に名詞と形容詞の両義あるとして *s. & adj.* としているが、『英和対訳袖珍辞書』では名詞と形容詞で別のエントリーに分けている。これも行数の増加になるわけだし日本語にとって好ましいわけだが、このようにエントリーを別出しにするケースはごく限られているので編纂担当者の裁量で行われたと考えられる。

4. むすび

訳語の構成からオランダ語から邦訳すると英語の意味と違ってしまうことがあることを明らかにした。また印刷されたページの構成を分析することで『英和対訳袖珍辞書』のエントリーに実践的な工夫がなされていたことが分かった。

ところで我が国で最初の英和辞書はオランダ通詞の本木庄左衛門（正栄）が中心になって文化 11 年(西暦 1814)に完成させた『諳厄利亜語林大成』である(本木庄左衛門（正栄）編(1814))。本書の編纂にはオランダ語を駆使したことが残っている草稿から確認できるのだが、本木は次のように序文に書き遺している(本木正栄　1982)。

> 諳厄利亜所有の言詞悉く簒集譯釋し傍ら参考するに和蘭の書を以てし猶其疑きものは佛郎察の語書を以て覆譯再訂し遂に翻して皇国の俗言に歸會し（後略）

つまりオランダ語だけでは解決できないことがあったと述べている。本木は具体的な例を示していないが、『英和対訳袖珍辞書』の邦訳からその問題点の一端を明らかにすることができた。

参考文献

堀 達之助編 (1862) 『英和対訳袖珍辞書』江戸：洋書調所.

岩崎克己 (1935) 『柴田昌吉伝』東京：岩崎克己.

桂川甫周編 (1858) 『和蘭字彙』安政 5 年 [1858] 跋 江戸日本橋通：山城屋佐兵衛.

三好彰 (2007) 「新発見『英和対訳袖珍辞書』の草稿および校正原稿の考察」『英学史研究』40:87-103.

三好彰 (2009) 「『英和対訳袖珍辞書』における英語翻訳の考察」『英学史研究』42: 105-118.

三好彰 (2011) 「『英和対訳袖珍辞書』の文法関係邦訳語の考察」『東京大学言語学論集』31: 101-115.

三好彰 (2012) 「宮崎元立と英学(続)」佐賀大学地域学歴史文化研究センター紀要第五号: 39-50

本木庄左衛門（正栄）編 (1814) 『諳厄利亜語林大成』長崎：未刊行

本木正栄 (1982) 『諳厄利亜語林大成　草稿』(長崎市立博物館所蔵本の複製) 東京:大修館書店

名雲純一編 (2007) 『英和対訳袖珍辞書 原稿影印』高崎：名雲書店.

日蘭学会 (1994) 『オランダ語辞典』東京：講談社.

杉本つとむ編 (1981) 『江戸時代　翻訳日本語辞典』東京：早稲田大学出版部.

Picard, H. (1843) *A new pocket dictionary of the English and Dutch Languages: remodeled and corrected from the best authorities.* Zalt-Bommel: John Noman & Son, Netherlands.

Picard, H. & Maatjes, A. B. (1857) *A new pocket dictionary of the English and Dutch Languages, 2nd ed., rev. and augm. by, A.B. Maatjes.* Zalt-Bommel: John Noman & Son, Netherlands.

Some Considerations of Compilation Method of the First English-Japanese Dictionary Published in Japan in 1862

Akira Miyoshi

Keywords: English-Japanese dictionary, English-Dutch dictionary, Compilation Method of English-Japanese Dictionary

Abstract

Most entries of the first English-Japanese Dictionary, published in 1862, Japan, are obtained from Picard's English-Dutch dictionary published in 1857. Some of the Japanese expressions in the dictionary are translations of Dutch expressions in Picard's dictionary using Dutch-Japanese dictionaries, and others acquired from knowledge of English without using Dutch dictionaries. In the former cases, lack of applied knowledge of English resulted in some incorrect Japanese expressions when the Dutch word had multiple meanings in Japanese. However, most compilers of the first English-Japanese Dictionary are considered to have sufficient knowledge of English, as such incorrect translations are limited.

There are some entries of the first English-Japanese Dictionary that are not found in Picard's Dictionary, while some entries of the Picard's Dictionary are excluded. These are due to practical devices to make the block copy from the hand manuscript.

(みよし　あきら)